

アッバスグル・ナジャフザデ  
芸術学博士

# ガヴァアルダシ



楽器は音響の性質によって幾つかのタイプに分けることができるだろう。それは、体鳴楽器（調律が少し必要とするもの）、打楽器（皮革、人工皮革）、ドラム、気鳴楽器（管楽器）および弦楽器である。形と音響の単純さから見れば、一番古いのが体鳴楽器であろう。アゼルバイジャンにある体鳴楽器の歴史古さを証明できる歴史、考古学、文学、言語学と民族学的な資料の蓄積がある。

著名な歴史学者であるナシル・ルザイエフ氏が次のように記している。「我々はアゼルバイジャン芸術の最古遺物をゴブスタンの岩絵だけで見られる。尖った石で搔かれたそれらの画像は紀元前13千年紀—10千年紀に属する」。

体鳴楽器の有名な形としてゴブスタンにある岩の塊、所謂ガヴァアルダシー石のタン

バリンが挙げられる。研究者によると、ガヴァアルダシの創造の歴史は、人類が動物界から分離された石器時代（100万—150万年前）に遡る。他の史料によれば、ガヴァアルダシは、現代人（Homo Sapiens）が出現した時に、が3万5千—5万2千年前の後期旧石器時代でも知られていた。

筆者は2006年にバクー滞

在のTRT放送局の職員グループとともに、自然そのものが作った楽器、その音質を紹介する目的でゴブスタンへ行った。そこの岩を興味深く眺め、我々の祖先の息を感じていたかのようにだった。ここで行われた様々な研究に基づいて学者らは、アゼルバイジャンは人類文化の最古の中心地の一つであると明らかにしている。ゴブスランに関し、そ



これは独特な天下に原始社会文化の独特な博物館であり、そこに先史以前芸術の最も重要な作品が少なくない。その地域は、音楽の発生地であり、踊りの最初の舞台であり、最初のアートスタジオである。国連教育科学文化機構がゴブスタンを文化的世界遺産として登録したことも当然のとおりである。

ゴブスタンの岩絵は、10万—12万年前に生じたと言われる。それらは、1939年にアゼル日ジャンの考古学者のイスハック・ジャファルザデ(1895—1982)によって発見され、研究された。ボユックダシ、チンギルダグ、ヤズィルテペの地域では約6000の古代の絵、石器時代の10以上の古代人の居住地、住宅、たくさんの墓及び他の遺跡が発見

された。紀元前12千年紀—11千年紀にチンギルダグには狩猟者の部族、キチクダシには漁師の部族、ボユックダシには牧畜者の部族が住んでいた。先行研究によれば、石器時代にゴブスタンは、亜熱帯地方の気候があった。

ボユックダシという山に古代ローマ人が紀元後1世紀に遺したラテン語で書かれた銘刻がある。その銘刻はローマ皇帝ティトウス・フラウィウス・ドミティアヌスの統治時代(81—96)に属し、第12ローマの軍団がゴブスタンに来たことを証明している。それは、コーカサスアルバン国とローマ帝国の間に経済関係があったのも明らかにしている。

チンギルダグの地域では14世紀に属するもう一つの岩

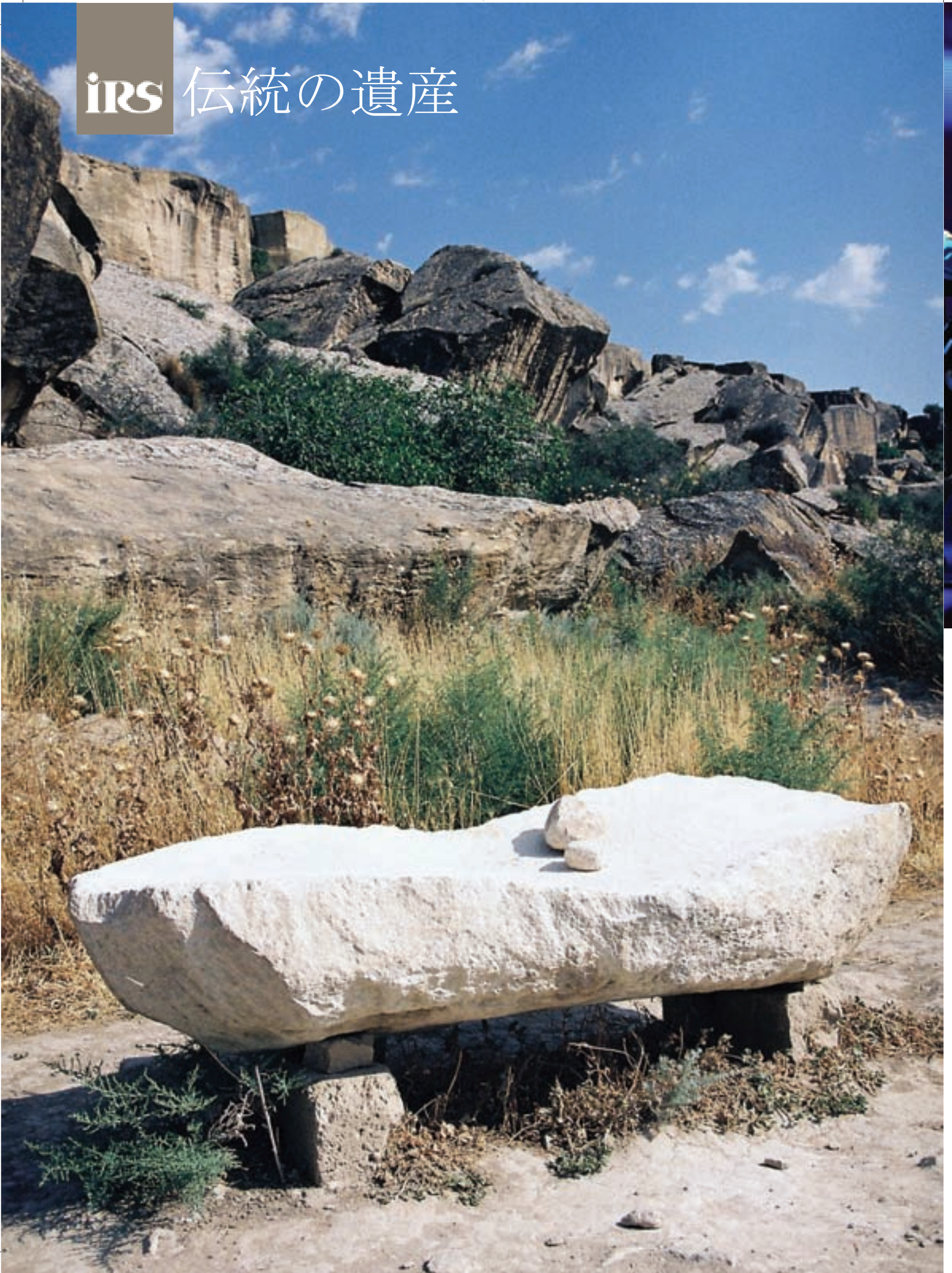
の銘刻がある。それはペルシア語で書かれており、「イマド・シャキは来訪し、祈願し、去った」という。イマド・シャキという人物が知られていないが、その銘刻からすればこの地域が14世紀に至聖所であったと判断できるだろう。

ゴブスタンには2つのガヴァルダシがある。一つがチンギルダグ、もう一つがボユックダシ山である。また、ガヴァルダシはこの地域に住んでいた猟師らや牧畜者が使っていたという公算である。何千年前にこの地域に居住した我々の祖先がガヴァルダシを中心に焚き火をし、楽器の伴奏で「ヤリ」に似たような踊りをし、それは岩絵が証している。

言語学博士、ガファル・



irs 伝統の遺産





ヘリスチ教授（1924-1997）がチンギルダグという地名の由来について説を立て、それによれば、シャーマンらが儀式の時に使っていたタンバリンという意味のテュルク語の「チンギル」から来ている。従い、チンギルダグという名前は直接に自然の楽器—我々が「ガヴァルダシ」というものと関係している。そして、依然タンバリンに似たような「ドゥングル」というアゼルバイジャンの楽器があったことを言っておきたい。

ガヴァルダシは、言わば統一性のシンボルとして利用されていたのである。古代人はそれと隣にお祭や宗教的な儀式を行ったり、それを中心に集合したりしていた。ガヴァルダシの他にはあし・革・木などの原料からできている

楽器も用いられていたことが明らかである。

有名な政治・社会活動家、民俗学者であるアリヒュセイン・ダグリ氏（1898-1981）が『オザン・ガラヴェリ』という著書の第3巻に於いてガヴァルダシについて面白い事実を取り上げている。その著書に入っている『石の楽器、水の番走者、自然な歌声』という記事ではグバ地域で観察していた自然現象であるトゥック革から聞こえる音について記述している。

「そこにキャスナット村の周辺に不思議な山の川がその急速な流れで印象的な景色をつくっている。水がかたい岩を貫き、ミナレットの下に流れているかのようなのである。川をじっと見つめて聞いてみたら、だれかがミナレットの中

で音楽を演奏しているかのように感じるのである。しかし、それは流れている水の旋律的な音だと判明している」と書いている。

ダグリ氏は、『オザン・ガラヴェリ』の第3巻に「ラヒ・シェブディズ」という記事では、かつてバクー附近に音楽的な石があったと述べている。「問：ゴブスタンには雲の色の音楽的な石の他に似たようなものがあるだろうか？」

「答：私は子供の頃に石工の隣にいて、彼らを興味深く見ていた。私は鋤から聞こえてくる良く通る、音楽的な音に耳を傾けていた。私は、その音が好きになり、忘れなくなかった。今になっても、それらのチョングル・サズの弦からの音を心の中で聞いて





おり、当時を思い出す。

バクー附近のあの白い石にはこのような特徴がある。それは、斧で平坦にするか、鋤で削る時に、音を出し、不思議なメロディを思い出させる。石工は音楽的な音を出す石をよく見つける。ソ連時代前にそのような分かりにくい現象には注意が払われて居なかったのである。このような性質をもつ石の塊がビビ・エイビャット駅（旧シフヴェルディ駅）の貯水池の近くに昔からあった。私はその石の歴史について『未聞の音』という本の「恐ろしい岩」というスケッチで書いている。遺憾ながらも、サズの音を出せるその岩が第一次世界大戦の少し前に壊されたのである。

語源 「ガヴァルダシ」

という単語は二つのテュルク語から—「ガヴァル」及び「ダシ」—来ている。ガヴァルというのは、我々の歌手が用いていた片面の楽器であり、「祝祭の器」、「偽造の器」と意味している。「ダシ」という部分はその楽器が石で作られることに指している。そして、演奏者はこの楽器の上に2個の小さい石を持って叩いていた。

ガヴァルダシの音はガヴァルの音に似ていた。だから、12世紀に、ガヴァルダシ自体が出現した時に、その楽器がガヴァルダシと名付けられた。依然にそれを「ダシ・アレット」（「石の楽器」）、「ダシラ・チャリナン・アレット」（「石を使う楽器」）等のように名乗っていた可能

性もある。ガヴァルダシにある程度似ているものは、様々な国で見られ、それらに「リトフォン」（ギリシア語で lithos が石、phone が音、即ち、「音の石」）という科学的な用語がある。

形態及び利用条件 ガヴァルダシは、貝殻の石炭岩からできている。石炭岩の平らな形をしており、岩にはただ2カ所で寄せかけており、空気の枕に立っているかのごとくである。ガヴァルダシの石炭岩での貝殻の密度によって、部分的に様々な音を出せる。音の区別は、貝殻の空虚さ及び多孔性と原因している。古代人は大きい音を出せる石をその上に小さな石を叩くことによって探しており、色々な音を演じていた。古代

人は一体どうやってガヴァルダシを見つけたらうか。

周知のとおり、原始人が空の石を叩き、木の破片を打ちながら、最初の体鳴楽器、つまり調律が少し必要とするものを作っていくうちに、そのような手段で様々な音が出せることが分かってきたのである。部族の番人が野生動物の攻撃や他の危険の時にこの楽器を用いたとの公算がある。このように、古代人は初めてガヴァルダシについて知ったと言えるだろう。ガヴァルダシは住居地から離れているところにあり、その音が2, 3キロメートルまで聞こえるということがこの説を肯定している。

演奏者は、上に小さな石を叩きながら、ガヴァルダシの音を出すわけである。このように、さまざまなトーンと反響の音を出すことが可能である。

有名な演奏者 1965年に巨匠演奏者、国の名誉演技者のチンギズ・メフチエフ氏(1932-1992)が初めて公衆にラジオ番組で演じた。また、1978年にアゼルバイジャン放送局の番組においても公演した。その後、この奇跡のような楽器を人民芸術家サディグ・ザルバリエフ氏、名誉演技者ナティフ・シリノフ氏、タイル・ヒュセイノフ氏、ジャヴァンシル・ガシモフ氏、エリデニズ・ハジアガエフ氏等も演じた。筆者は、全ての打楽器の音楽家に一度でもゴブスタンに来ていただき、ガヴァルダシを見て、その音を近くで聞いていただきたい。◆



#### 参考文献：

1. Рзаев Н. Голос веков. Баку, «Азернешр», 1974 (N. ルザエフ、『時代の声』、バクー、アゼリネシリ出版社、1974)
2. Абдуллаева С. Азербайджанские народные музыкальные инструменты. Баку, «Адилоглу», 2007 (S. アブドゥライエヴァ、『アゼルバイジャン民族の伝統的な楽器』、バクー、アディリオグル出版社、2007)
3. Толковый словарь Азербайджанского языка, III том, Баку, «Эльм», 1983 (アゼルバイジャン国語辞典、第3巻、バクー、エリム出版社、1983)
4. АСЭ (Азербайджанская Советская Энциклопедия, VII том. Баку, 1983 (アゼルバイジャンソビエト百科事典、第七巻、バクー、1983))
5. Бунядов Т. Звуки доносящиеся из веков. Баку, «Азернешр», 1993 (T. ブニヤドフ、『時代から聞こえる音』、バクー、アゼリネシリ出版社、1993)
6. Джафарзаде И.М. Наскальные изображения Гобустана. ТИИАН Азерб. ССР, том XIII (I. M. ジャファルザデ、『ゴブスタンの岩絵』、アゼルバイジャンソ連共和国の科学アカデミー、第十三巻)